へ遠13
2378
20

櫻草娘庭訓

合巻二冊

演名家桑半ゲ

おびや長たろう 再生

栗園要之助

仕言
作者 櫻田左交述意

山東京伝作
常磐今文化已春
歌川豊國画
全部八冊 筆耕 桂本徳瓶
同門人 富治
刻成発兌 刻工 石川長左門
同弟子 亀治
江戸高砂町
板元 南新道 いがや勘右衛門

めくそんきりけぐさ むさうろてきさんもーしょ
むさうの秋草嘆度訓図解

常磐津興版元 伊賀屋梓
作者 山東京山述

[illegible]

[illegible]

[illegible]

題辭

應志ゝ也紆差牟濃。於津之也都多者。保牟耳遠南胡者。已通之也紆介。越都途ゝ夷不者。多ゝ飛登里。不多理遂波太於。布礼留農者。於南古天難意途異。飛子之玄。雄牟那伊万加波。天以徽牟耳。可以低遠。忱延之。不互乃愛也。

山東京山撰

文化五年秋七月稿成

文化六年春正月發兌

彫梓則麥莫
巧裝演則星
其精 文龜字師

濱名家之
妾半贈栗
田要人和哥

扇雲

かくとわど　たのしくあつとと　きくときハ

う　きがまとの　ち　ぎりあり

○帶屋町右門ハはじめ濱名家ゆつゝそ栗田要人と名のる○ゑなのやおそんハまるあどゝてゆ半が再生す

松ちゞ左仲
やさち幸左エ門

二人の妾
平生
たゞひわ
龍をあらそふる
盾のごと
秘蔵
書と
半
橋富

京柳馬場
帶屋町右エ門が
倉のうちより
鞦人ハ化して
立さる女ハ
巻中ハ云ー
極天風雨無楊晴滿地
関山杜宇紅
○町右エ門妻
おさぬ

鶯の才伐
さうさるゐ
うろ音
一の南
寶晉齋
○栗田仁内之一子
要之助正春
○片岡幸之進

○佐野幸左エ門一貫持之柿板

○うらふくゝ金。地七子。金ゐん獅子牡丹　兵藤五守国作

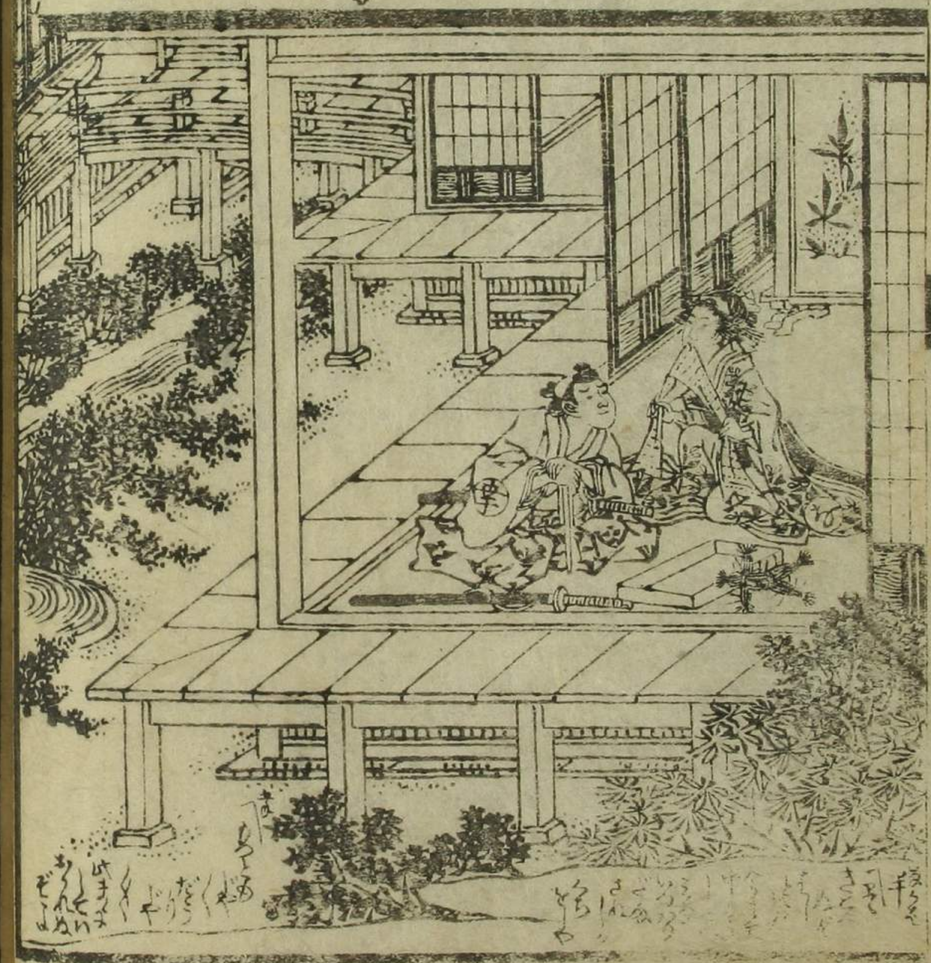
月下の老人

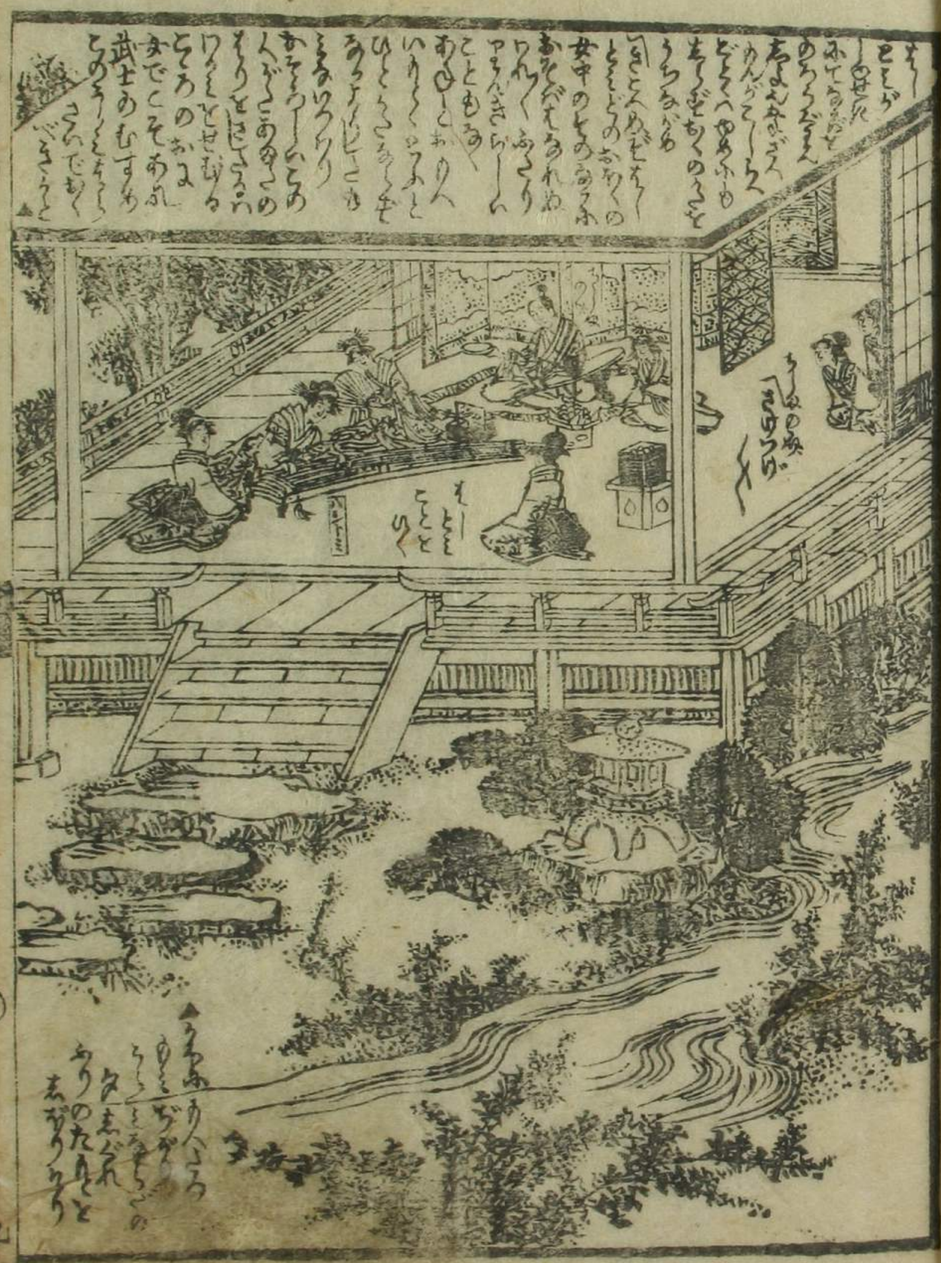
詞源かつたん

遠く千里の外にあり奈の郡司久松機織の男
海渡りよりそのもとに通ひ若衆おもとを
鬼ゝれ長崎に開業その道の男
ゝ女久渡酒とのむと見て心よろこ
ゝ氏久渡酒とのむと見て心よろこ
ゝ家の接をすゝめ心をうばひ
めんとたゝりるに中西乃清門ひそかに美女と
ゝぶるに中西乃清門ひそかに美女と
ゝ人乃きこえあり父母の進よりかくれ
ゝて父母の進よりかくれ
ゝ久たよりこび名をすゝとまゝ
ゝ久たよりこび名をすゝとまゝ
ゝ営中に殊氏久ありとかこと
ゝ半いさいちをくれさるこんな
ゝ悪とさこうみゝてた中が
ゝ悪人乃ゝこうたかくる悪人乃ゝこうた
ゝ清門乃中ことたのゝ
ゝ清門乃中ことたのゝ
ゝ栗田口の門ゝ

要

仁



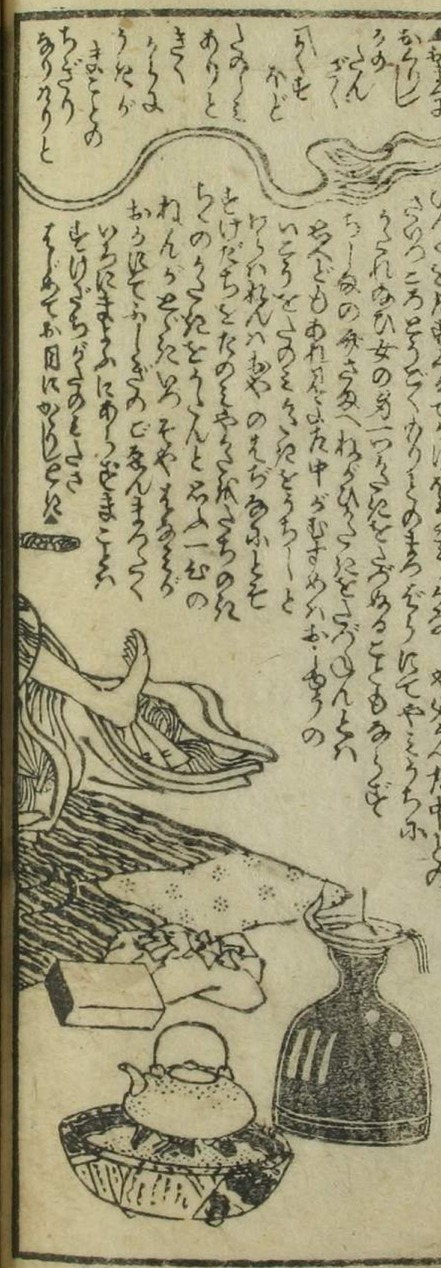


○半ぶん　栗田仁内作

かくをかどたのしこうとときくらんの
うちぶまとうちぶりあり

まづさにさくのいんろう

さげかの



だん八仁内がおやのと見てぎやうてんし
さてハ今うちはたし此うぢがいのやつこそ
きやつらんのちうるしろれこれごゆちの〜やうこと
ふへのちうるし〜おらいにとりつき
おいらハし〜や仁内さ奴ぶん八が
おやをもたらうちもしと
おきうせやしハ
いらしまぜね
けさに
きうくる
うしろきぞ
まさしく
だまし
うちふ
るし
そておの
いり
ざんねんや
とおらふ
めくまじ
あと
おろうけて
おたゆうの
うられ
そふじやくと
うけゆたしが▲

▲うちとでまりてまでおきし
うわどのこくそとおぐきとあつこくらふれ
うろつくまいゆらべだんなのおもじありし
いんきものそんぞうきのらうが仏ゆとるい
まふいともあれうのそんぞうとおもでせんと
又五ゆどうりおやのくまいちう「コリヤ」さいせうの
そんぞうまでうがひとりしうてハあんとせん
むねんやとぶいちんどうとうおりてたをとらひ
あずるむ妹んのおとごくさにつゆおくだろう

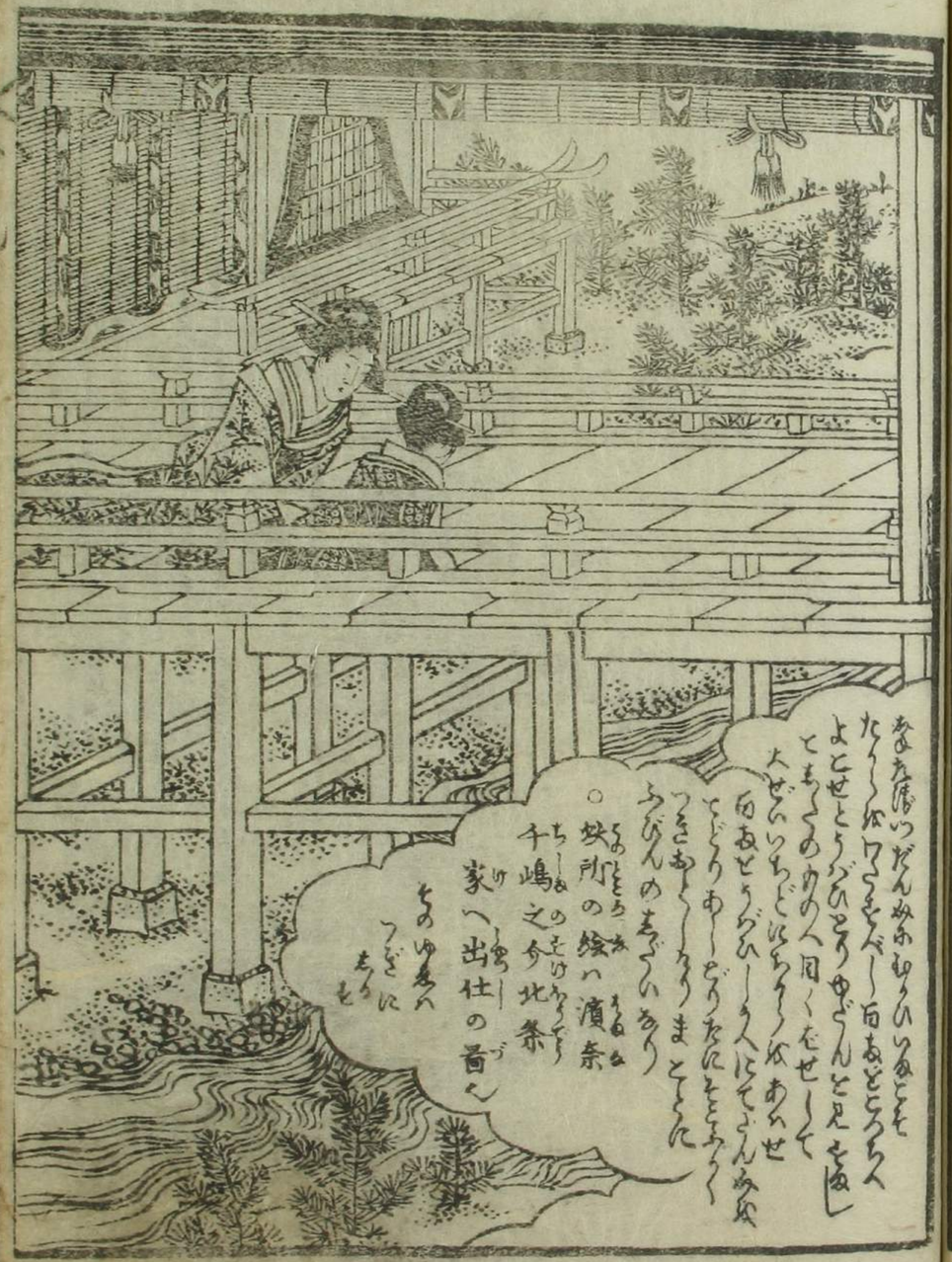
「あらうがいが
きれの
てがらり
まそていのが
ふろ
さ

かくてだん八仁内がおやのとせあひおいてわがやへ
立かへりしのおさのをあなたのやくにたつやうにおもうに
ちう奴の奴どの大にいかり大せつのそんぞうを
もしかのこあうしぞうたえは
まうともねへせずすもくらうとこと
らんもかえうけあけらいへのきやしや
ありそておちうのいんへわつしゆやつけられる
かくてぜん八らおやの奴がおれがみづがあた
おさらにくろうかるにかあめの奴が
あけきこかおさらもまやはやき見る
あのしてわきされてあそぶもゆそかとを
さいうにされてあそりそうだん八かの
かうがいをとりいビうのへのてがいりを
やもされば一おあんとくろあめへまいり状が
てにとりわけのおおそへあるはかうがの礼こそ
うさおり安れきうがおふのちのおふさてたうふ〇へあまたち
ぜん八つけとおうとうがとおまのおんがしへにあせゆれね
〇せ紀ふけたいさらおあめの奴ぜん八とをゆにつれ安のしんが父の
ろのかうがいを安のおんがまんにおきさうんぞうかけらるゝかあめの
とようひわざくきう見しわよのぎれおうぞとけおか見んおやを
くしれとうへてとひうれべわのにぞうぜね安のしん「あらわとこれハ
せぶれがひそうのさし「やゆういくでしておていにいりし
ふあんさうれがあおめの奴「さうやそそまし「づくハて
おや仁内とたましうちをまつさへおいへのたく
りんきのそんぞうをうばひとりうちのく
あせのであひがしちらうがうのてより
そんをけへうちつけうるはかうが
かよた情つぎさし「おちうとあれが父を
おてそんどうとうがひとりしわ
あまた情けれうくらひあし
うんどもまゆうぶせんや おく〜

つゞくつゞく

「これのし安とぶつるかん
うんしもまけ
ぜん八さい

「せいきれ
こちを
あそん
ぞろ
安彦のおれ
かくろの
ねぐくて
で
ござり
まる



○
炊所の絵い漬奈
千嶋之今北条
家へ出仕の首く

山東京山作

歌川豊國画

○京山篆刻
水昌銅下
ろ石一字から
赤でん色そ
石次仕ノ

○いなづまべにとそうえ
本朝醸菩提
京傳作
ろ国画 全八冊
ろいさーちん ねえ いがや

山東京山作 文化六年巳春發兌

娘庭訓後篇目録

第一 恨の衣 まことの字を訓でのひあみろおちん要人の恥い武士とやめて長右衛つ結んでとけぬ帯やれ花婿

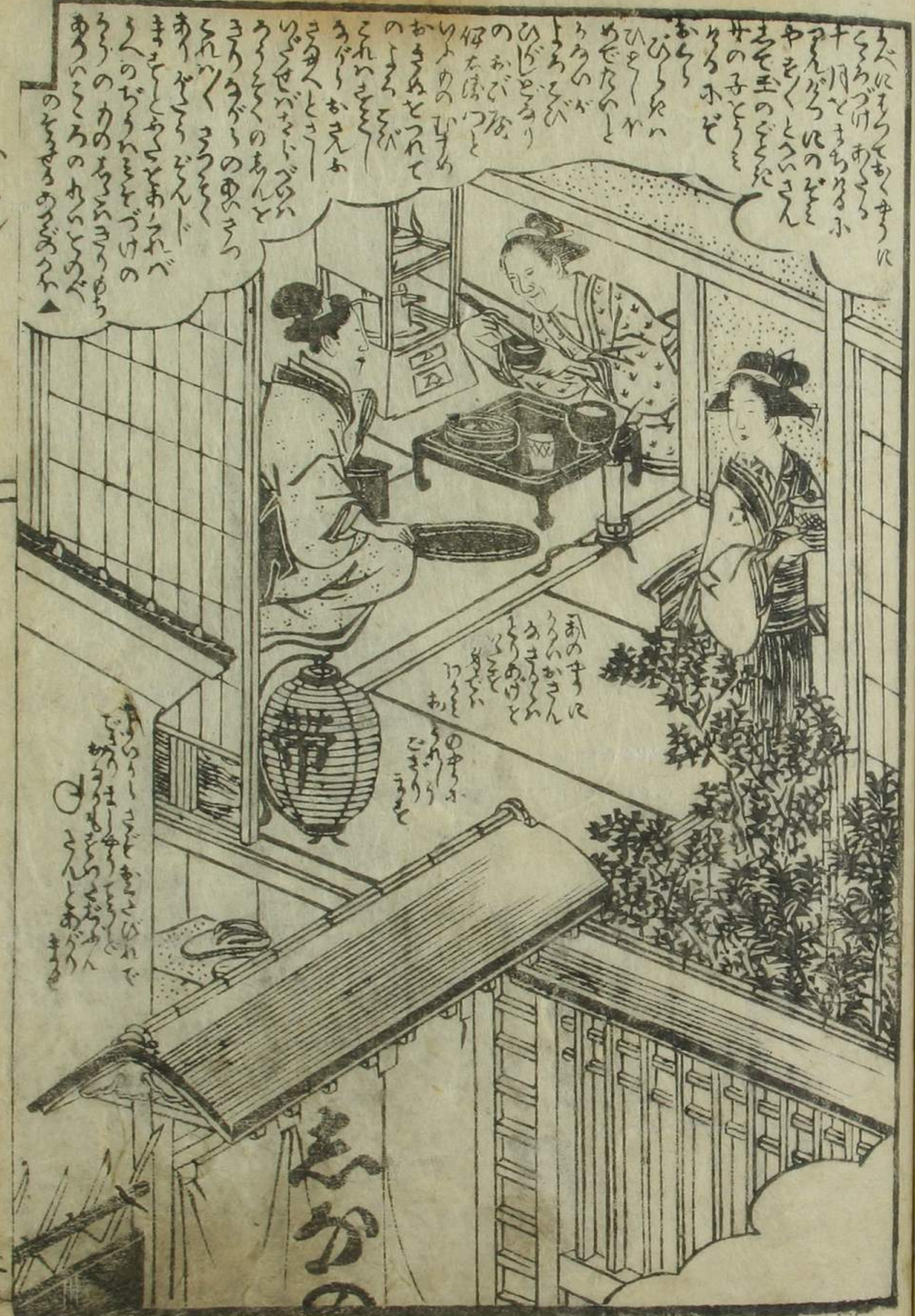
第二 縁の箪 偽えん絆さん中ろく著もま奴連いせ海乃で相の山ろ山ろ紙ふもちんざ池の小路乃振袖

第三 操の双 家重代の一擬い光のさを女房ざろ姉宿の踊の恵比下坂切ぬきーしぬ親子共弱ぬさ乃しぬ十の京平

第四 歡の杯 孝之進が恵義ハ英金の刀再ま に入弥陀の名傷 槌川よりまりと號と親乃仇ろろ

歌川豊國画 東都書坊 文亀堂梓行

つゆおいー
帶や幾おろす
帶屋佐左ヱ門
○信濃屋の家ゐて出生の音


帶

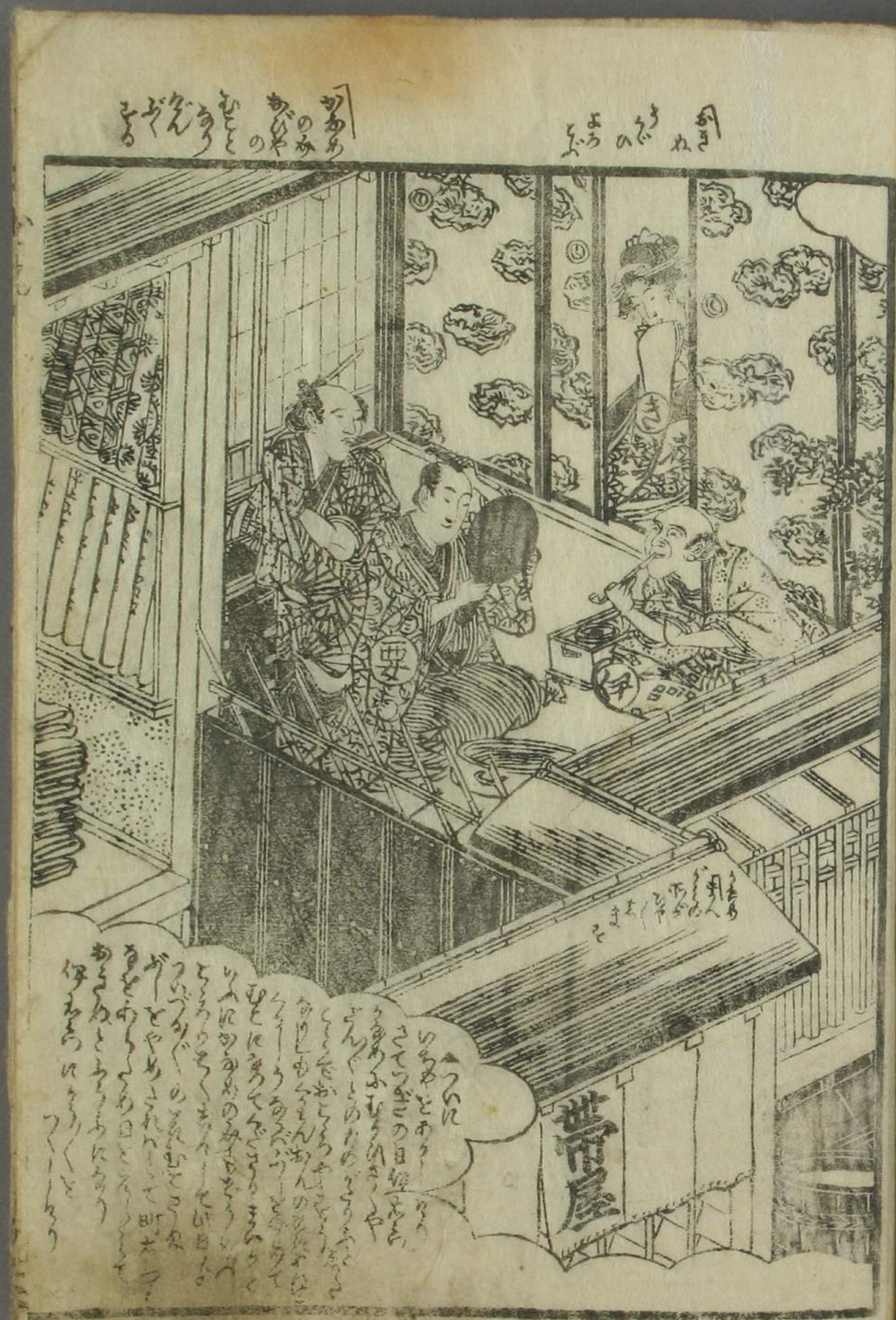
観世音菩薩
観世音菩薩

要

入口

奉納
清銅
十貫
文
奉納

納
二十両
天蓋一對
願主
濱名

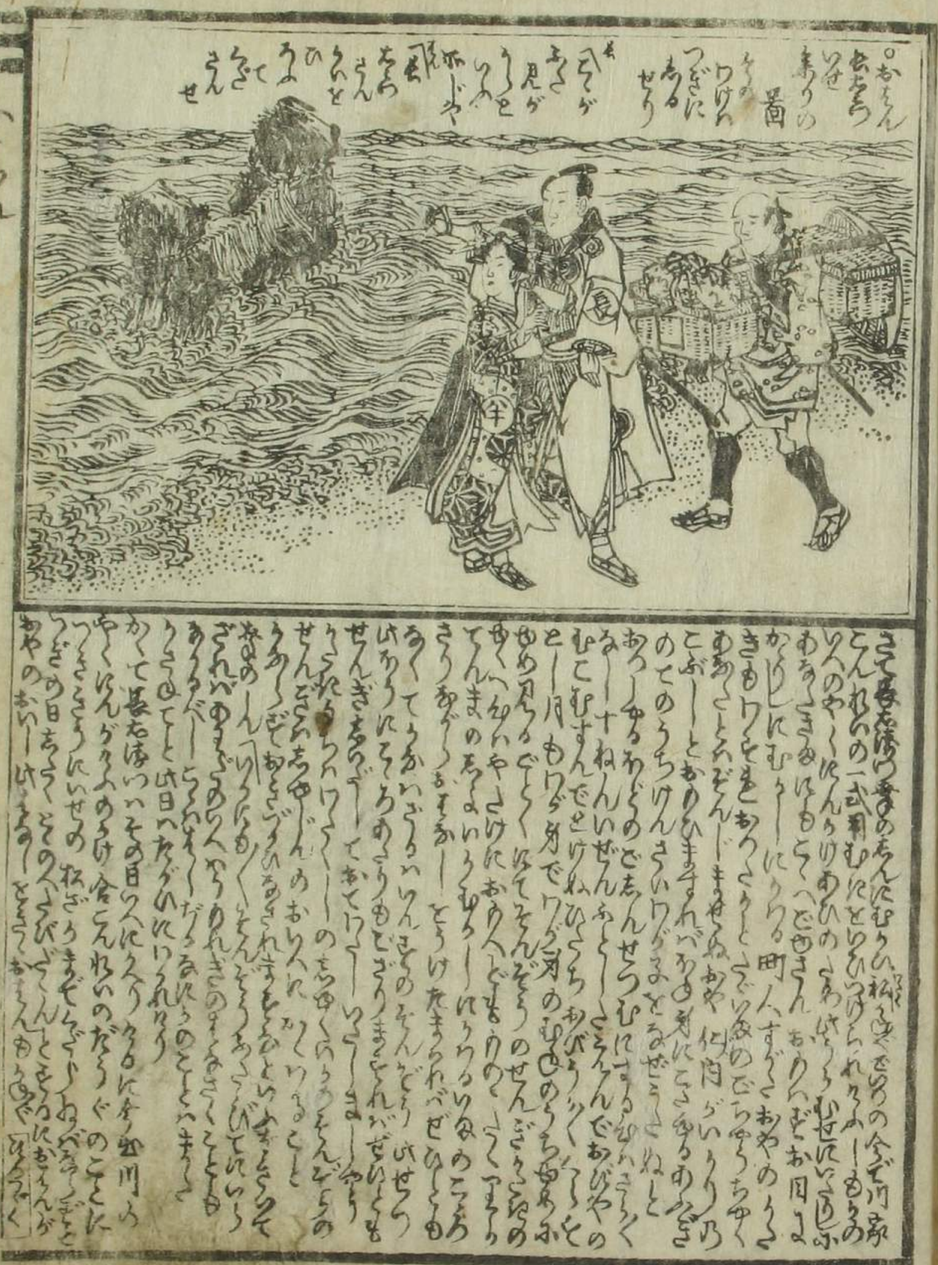

帶屋

青の屋

評

粟田要人助主人の家にうてかぶりぬりんものとぶのせんぎといふことをまつあやのうさとそ
らうんとするたいまうとめくーヨにそあびや屋のむすめおさぬがすぐごにまうひーとそも
いろにさへおれさりしもんているれいばおびや屋のむすめおさぬがすぐごにまうひーとそも
いひぐーおりふにれおろががあん祢んもんげきやうかんにけけりてばんせのあく
こうとのれかあろぐごろともらくませーゆくまろぐーおそろぐーく

曰



おびやの
くらのうち
まりのさち
人ふけーて
立さるか
のあ
むをろーや
くーや

つぎさ いんさのそんぞうとうぶの〜とに仁内ぎせぐれやかりの助けで身とうさんとぬらうことどうぶく
さうそれいなにいとかわれまぐとうぶんいけりいにぐれすとたまへひとうまるれいどてらやらしとんに
れろうりさてとうべの幸たちにいろいろいんまとうぶんとんにあ〜れさちんさ
おびやあたちとあのりあ〜ことじにそ人にあ〜れさちんさのあれいられるいくひとうさうぶくにきうとすへてかやうく
くあ〜ぐいれもスそのわとうあたありんぐりへにとこ〜とすへてかやうく
かりうちうまうくりりいうちんにつりて五月ぬとうぐ〜
あたありんぐへにいとんろうこれにあたりんいせ〜うりかりて
せんぎにあんとこ〜しるうがあるロかるふるあ〜がとのろ〜
ずっとるにかるのりの大におどろん〜ぐあたちらこちのぐ〜
うとんにおどろんよういのひとこ〜
またちたく〜のとうぐくあやのぐとこすもうぐかとうぐ〜
つりよすれいまたらせちらぐ〜ひ〜うくのわ〜〜
おのつてるまたちうとけとりつてもうどきにせん町人とあり
さぐこにまたちうんぐ〜ぐどとんぐうとうのうとうとうと

長
「あまりとしがよくないぞ
京
「いりくぐとちりのいぬのこと
傘をとられて
七十あまりあに
ちりてはいりくぐ
あまりいのぶんが
のるめんぐか

長
「こちの人おまんえへいろんーてごさんせ

右
左

山東京山作
歌川豊國画
筆耕德瓶